

鬼北町立広見中学校

道徳通信

道徳主任 酒井 智有

NO. 69

令和8年5月22日発行

よりよく生きる

独立行政法人国立青少年教育振興機構から、子どもゆめ基金10周年記念として、過去に学校に送られた「かがやく先輩からのメッセージ」は、子どもたちに向けて送られたメッセージをまとめたものですが、非常によい内容ですので紹介します。

「かがやく先輩からのメッセージ」 富田 洋之(とみた ひろゆき)

とても元気で活発な子どもでした。休み時間になると、一番に運動場に出て行ったり、給食も一番に食べ終わったり。鉄棒や跳び箱も得意でした。8歳から、「マック体操クラブ」に通うことになりました。友達に誘われて気軽に始めたのですが、もともと体を動かすことが好きだったので面白かったです。声が小さかったので、挨拶の練習は何度もさせられましたが。上級生みたいにバック転や宙返りをしたくて、練習時間の前に、怪我をしないようにふかふかのマットの上で一人で練習をしていたこともあります。バック転は10歳でできるようになりました。その頃、クラブの先生に「体操を本格的にやってみないか」と誘われ、選手コースに通うことに。週1回だった練習は5回になり、鉄棒も跳び箱も一気に高くなりました。「あん馬」も始めましたが、最初はとても難しかったです。



12歳の時、バルセロナオリンピックの体操で、旧ソ連のビタリー・シェルボ選手の演技に衝撃を受けました。床に伏せるような動きでさえ美しく、難しい技も簡単にやってのけるように見える。それから僕も、「美しい演技」を追及するようになりました。中学には体操部がありませんでした。体操部がないと中学校選手権に出場できないので、校長先生に「体操部を作ってください！」と直談判しました。2年生の時に体操部ができ、3年生で全国大会に出場することができました。

高校2年生で出場したインターハイはシドニーオリンピックの予選会もかねていましたが、僕は最終予選で18人中18位という成績でした。でも、代表に届く成績ではなかったことで、試合中に周りを冷静に見ることができました。代表に選ばれるような選手の試合運びや観客の雰囲気を見て、こんなに緊張する場所で演技をするには、相当な練習をしないとイケないと感じました。技ができなくて悩むことはなかったです。体操では、できていた技ができなくなることはよくあること。むしろ、できないことはチャンスです。またその技に試行錯誤することで、以前よりうまくできるようにもなりますから。体操をやめたいと思ったことはありません。でも、鉄棒の練習をしていると手の皮がどんどんめくれて、とても痛いんですね。それでも練習をしないとイケないのはちょっときつかったです。また、怪我に対しては常に恐怖心を持っていました。恐怖心がなくなると集中力もなくなるので、隙が生まれて、怪我をしやすくなりますから。

僕にとって試合は、練習してきたことがどんな成績になるのかを確認する場でした。本番は、どれだけ反復練習してきたかにかかっています。「試合の結果は練習の段階で決まっている。勝ち負けではなく、納得できる体操ができれば結果はついてくる」。そう思っていたので、アテネオリンピックで金メダルがとれた時はとてもうれしかった。体操は「体を操る」と書きます。どう動けばどう体が動くのかを意識しながらやってみてほしいと思います。